

各施設年次報告

芦生研究林年次報告

芦生研究林長 伊勢武史

●教育研究

2017年度における芦生研究林の教育研究利用者総数は2,952人で、昨年より92人増加した。実習等の教育利用者数は1,016人で、うち学内利用は656人と前年より149人減少した一方、他大学の利用は227人で16人増加した。また研究利用者数は1,936人であり、学内利用が前年に比べ293人増加、他大学が26人増加した。教育研究の受け入れサービス向上のため、送迎など技術職員の補助が150人工と前年より181人工減少した（いずれも延べ人数）。

学生実習のうち2件はフィールド研が主催し全国の大学から学生を募集して行われた。全国大学演習林協議会と連携して開催された公開森林実習では、8大学（筑波大学、広島大学、東京農工大学、早稲田大学、九州大学、京都学園大学、鳥取環境大学、人間環境大学）から26人の学生が参加し、協定に基づく単位互換手続きが執られた。この実習の前半日程と同時に本学の少人数セミナーも開催された。「森里海連環学実習 I」では、学内の複数の学部生のほか、他大学（京都学園大学、宮崎大学、東京農工大学）からの学生も参加した。

研究として、本年もシカによる植生変化に関する内外の研究者による一連の事業が実施された。上谷の一流域（ウツロ谷）において13haの集水域全体を防除柵で保護する試験が行われており、設置後10年を経過して回復がみられる植生のモニタリングとともに、水質に関するモニタリングも継続して実施し、卒業論文等の作成に活用された。近年シカによる食害が著しい芦生研究林では、このような防鹿柵の設置と管理は、教育研究を実施する上で大変重要な業務となっており、本年度も研究林職員が積極的に柵の維持管理作業の補助を行った。さらに今年度は、上谷の別の流域（モンドリ谷）にも大規模防鹿柵を設置した。

加えて、フィールド研の研究プロジェクトである林内の実生発生調査、種子生産量調査および採水・水質調査を継続した。



公開森林実習「樹木識別」



公開森林実習「北桑木材センター見学」

●社会連携

京大ウィークス参加事業として芦生研究林一般公開を10月21日に開催した。教職員による下谷、森林軌道の散策や、川魚調査体験、サイエンスカフェなどのイベントに応募者、当日参加者併せて60名が参加した。

地域のガイド団体によって設立された一般社団法人芦生もりびと協会との協定を締結し、ガイドツアーを総計 2,610 人受け入れた。その他に一般利用で 1,718 人が利用した。さらに、芦生地域有害鳥獣対策協議会によるボランティア活動に協力するとともに、「知ろう、守ろう芦生の森シンポジウムー芦生の森探索とシカ防護除ネット設置ボランティア活動」を共催した。



一般公開「川魚調査体験」



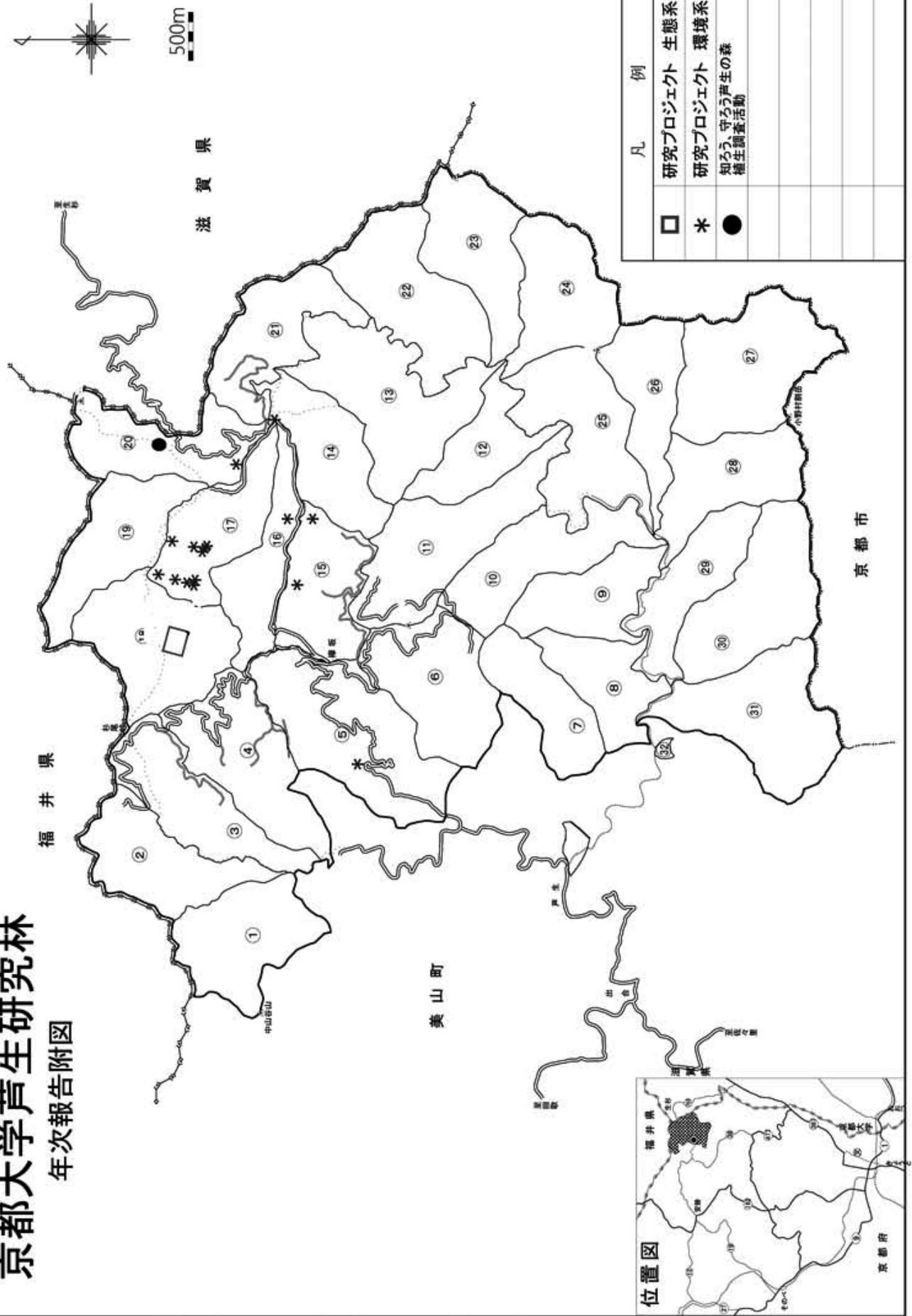
一般公開「原生林体験」

●施設の特記事項

2016年に、京大基金の枠組みで芦生研究林基金というクラウドファンディングを立ち上げた。2017年度にも引き続き多くの寄付が寄せられた。特に、12月から3月まで実施したキャンペーンは、寄付してくださった方々に記念品（芦生研究林オリジナル手ぬぐい）を差し上げるという企画であった。集まった寄付金は芦生研究林の保護と教育、研究の発展のために有効に使用していく予定である。

京都大学芦生研究林

年次報告附图



北海道研究林年次報告

北海道研究林長 舘野隆之輔

●教育研究

北海道研究林は、京都大学における教育研究に加えて、教育関係共同利用拠点施設として、他大学の教育研究も積極的に受け入れている。2017年度は教育利用17件、研究利用34件、その他利用3件の合計54件の利用申請を受け付け、延べ2,036人の利用を受け入れた。2013年以降は利用者が5年連続で延べ2,000人を超えている。

教育利用は、学内の実習として、全学共通および農学部の実習が3回と少人数のILASセミナー1回が行われ、延べ591人の利用があった。今年度から北海道研究林の常駐教員が2名体制となり、新任教員の専門分野に対応した新しいメニューを組み入れるなど新しい試みを行った。「森里海連環学実習II」は北海道大学厚岸臨海実験所と共同で行い、9月1日～9月7日の7日間の日程で、本学の7人と、北海道大学の11人の計18人が参加し、別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質、水生生物調査を通じて、森・里・海の繋がりについて学んだ。「研究林実習III」は、8月24日～31日の8日間の日程で18人が参加し、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに間伐施業などを実践した。「研究林実習IV」は、2月19日～2月25日の7日間の日程で16人が参加し、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学んだ。8月5日～8日の4日間の日程で開講されたILASセミナー「北海道の森林」には、8人が参加し、植生と環境条件との関わりを野外観察や調査を通して学び、間伐などの林業体験を行った。また2016年度からは、教育関係共同利用拠点に関連した公開森林実習IIを同時開講しており、京都府立大学、鳥取環境大学、東京医科歯科大学から3人が参加した。

その他、2017年度は、学外の実習やセミナーとして、酪農学園大学3件や北海道教育大学釧路校2件など延べ329人の利用があり、教育拠点としての他大学実習利用も増加傾向にある。

研究利用は、34件の申請を受け付け、延べ830人の利用があった。本学9件延べ455人、他大学22件延べ342人、一般3件延べ33人で、研究内容は森林の植生と土壌の関わりに関する研究、道東特有の気象条件と大気窒素沈着に関する研究、森と川の繋がりに関する研究、森林内の植物・動物・微生物に関する研究など多岐にわたった。



森里海連環学実習II（水生生物調査）



研究林実習III（間伐実習）

●社会連携

社会連携として、6件の催しを実施し、延べ227人の利用があった。日本学術振興会の研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の一環として、「大学の森で学ぼう 2017～～森の木を伐るとどうなるのか～」と題して、小学5、6年生、中学生、高校生を対象として行った。開催日は、8月4日で、参加者は12人に加えて、近隣高校の教員や受講生の保護者3名が見学にきた。

また2017年度も京大ウィークスの一環としてミニ公開講座を白糠区で行った。開催日は、10月21日で、参加者は10人であった。その他、例年行っている沼幌小学校との共催の「木工教室」、標茶町教育委員会との共催の「しべちャアドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座」、標茶高校インターンシップ受入れ、標茶小学校遠足受入れなどを行った。また近隣高校とのSSH関連の連携を開始した。

●施設の特記事項

2017年度は、昨年度に引き続き、教育拠点としての他大学教育利用の推進に力を入れた。近年の利用の増加に伴い、実習などで施設が埋まる時期の研究利用を断ることもあったが、施設を一部改築するなどの整備を進めた。また社会連携活動の一環として取り組んできた「ひらめき☆ときめきサイエンス」に関連して、「平成29年度ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞」を受賞することが出来た。施設一丸となって6年に渡り取り組んできた成果であると考えている。

2017年度は、新任講師の赴任に伴い教員二人常駐体制となった最初の年度となったが、これまでとは異なる研究分野の利用者の受入れが増加し、また実習内容も一部更新するなど、新しい取り組みを進めた1年であった。



ILASセミナー（植生調査）



酪農学園大実習（プロット測量実習）



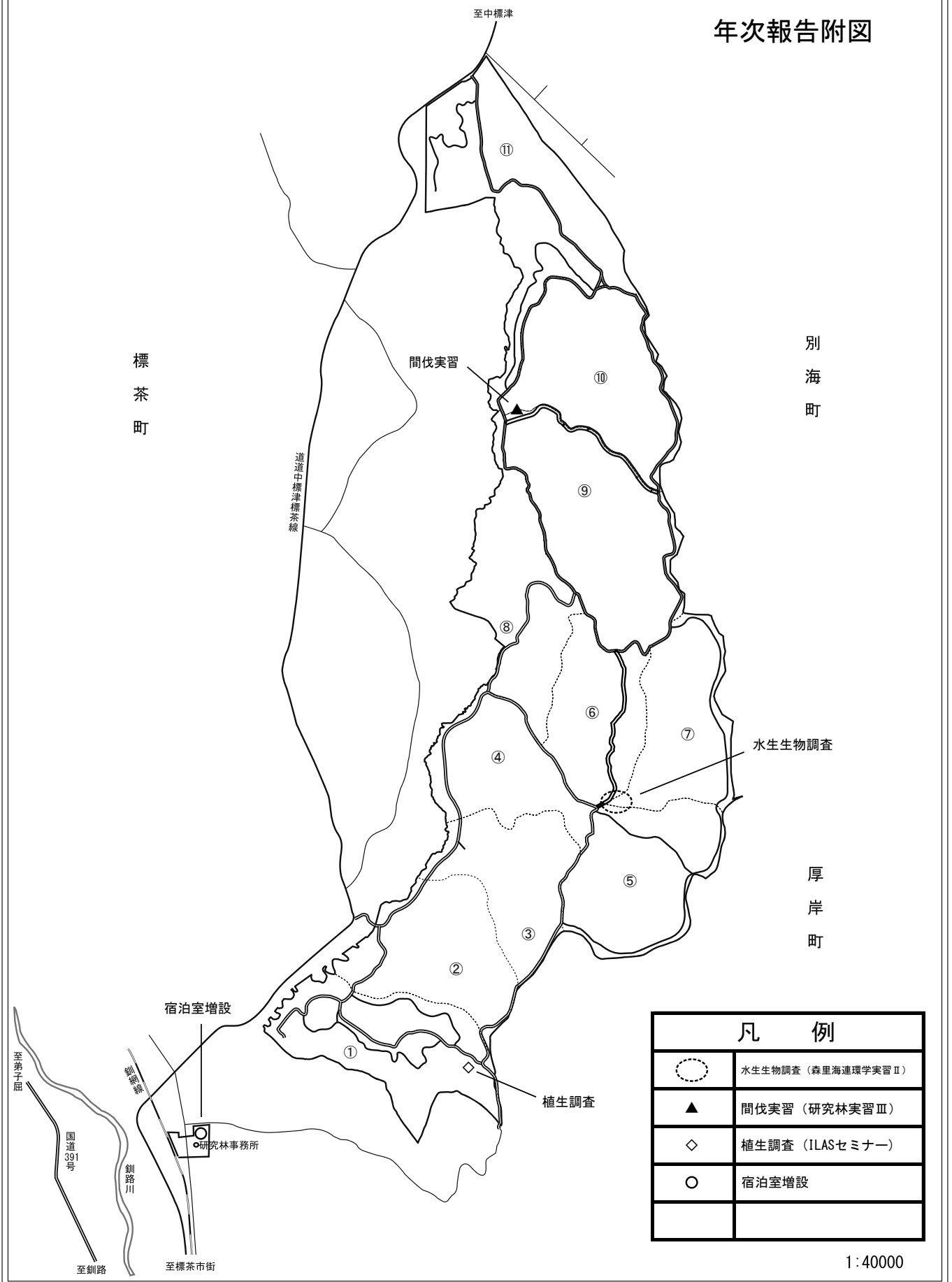
ひらめき☆ときめきサイエンス



標茶区管理棟宿泊室増設

京都大学北海道研究林標茶区

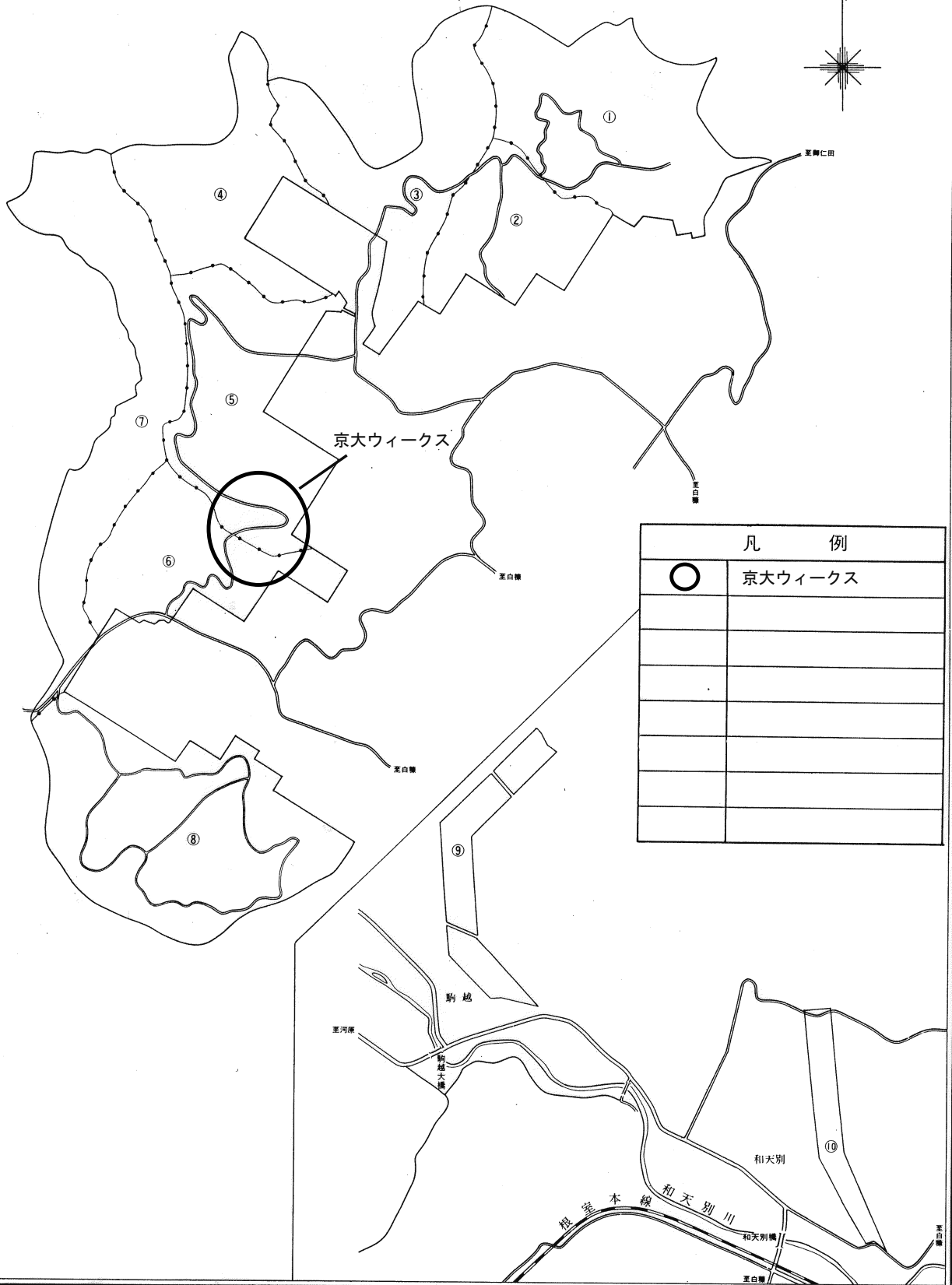
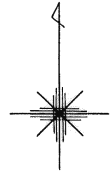
年次報告附図



1:40000

京都大学北海道研究林白糠区

年次報告附図



凡 例	
○	京大ウィークス

和歌山研究林年次報告

和歌山研究林長 長谷川尚史

●教育研究

和歌山研究林では、2017年度に17件の研究利用申請を受け付け、延べ1,031人の研究利用を受け入れた（昨年比222人増）。学内からの利用はフィールド研教職員や農学研究科、農学部などの利用があったほか、学外からは神戸大学、京都府立大学などの高等教育機関の調査が実施された。

教育利用としては9件の申請を受け、延べ224人の利用があった（昨年比137人増）。学内では1回生向けの少人数セミナー1件が開催された。また学外利用としては、有田川町内の小学校および高等学校による体験学習や中学校の職業体験のほか、SSH指定校である和歌山県立海南高校の1年生2名、2年生7名を対象にした課外実習と、本年度設立されたばかりの和歌山県農林大学校林業研修部の研修をはじめて受け入れた。また和歌山県立有田中央高等学校清水分校の利用として、今年も「SHIMIZU・タイム(森林ウォーク)」を開催したほか、3年ぶりに3年生対象の選択科目であるウッズサイエンスを開講した。ウッズサイエンスは同校との協定に基づく1年間のプログラムで、2002年度から森林調査法や森林科学に関する講義、実習を行っている。受講生は地域の森林組合などに就職するケースもあり、地域の活性化および人材育成に関する社会連携事業としても位置づけている。今年度の受講生は1人であったが、受講生は上記の和歌山県農林大学校林業研修部に進学し、地域の人材育成にも貢献している。また小学校の利用としては、今年度も有田川町立八幡小学校の総合的な学習の時間「森のことを知ろう」を受け入れ、技術職員を中心に対応した。また昨年度から独立行政法人日本学術振興会の事業である「ひらめき☆ときめきサイエンス」を神戸大学大学院理学研究科との共催で実施している。今年度も「寄生虫が森と川を育む！？～ハリガネムシを通して自然をみてみよう～」を実施し、県外から11名の高校生と引率者5名が参加し、参加生徒に未来博士号を授与した。

●社会連携

一昨年度に実施団体として登録を行った和歌山県の「紀の国緑育推進事業」に関し、同様に登録している清水森林組合およびマルカ林業（株）と連携した教育活動を昨年引き続き実施した。今年度は和歌山市立野崎小学校のマルカ林業（株）所有山林における学校行事に研究林教職員が協力し、間伐体験や樹木識別などの環境教育を行った。また3回目となる京大ウィークス事業「和歌山研究林ミニ公開講座」は、有田川町や教育委員会、地域の公共施設等にご協力いただき計画し、定員の20名を上回る31名の応募があったが、台風の接近によりやむなく中止した。

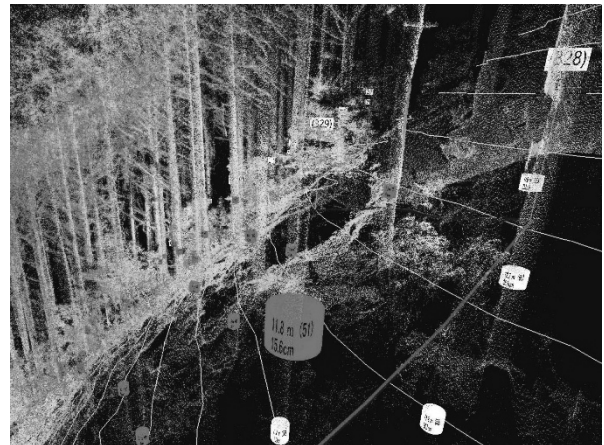
さらに2012年度から活動している、地権者であるマルカ林業（株）、和歌山県、およびフィールド研で構成する三者協議会については、本年度も和歌山県県有林およびマルカ林業（株）の間伐施業地における調査に協力するとともに、地域における持続的森林管理手法に関する意見交換を行った。本協議会における情報収集を元に立案した森林経営計画については、清水森林組合との協定に基づいて実行し、切捨間伐4.68ha、搬出間伐4.72ha、415mの作業道作設と、研究林利用者が利用できる路網への再整備を行った。

●施設の特記事項

和歌山研究林の事務所・研究棟は仮設物を元にしたプレハブであり、大人数の実習や研究利用を受け入れにくいことから、清水市街に清水分室を設置し、少しでも多くの利用者・利用グループを受け入れられるよう工夫している。これらの努力によって研究林利用者数は大きく伸びており、本年度の総利用者数は1,601人と、紀伊半島大水害前の2010年度から倍増している。宿泊可能人数の制限で、利用者数は限界に達しているが、今年度は研究資材置場の一部を改造してシャワールームを2機設置するなど、利便性の向上に努めている。一方、予算減少の中、842ha中約450haを占める人工林の整備・利用が進まないことも大きな問題であるが、上述の森林経営計画の実行と合わせ、県の環境林整備事業を活用して40haの保育間伐も行った。さらに近年、搬出間伐や路網作設などの業務が減少する中、技術職員の技術レベル維持・向上を図る必要があることから、必要性の高い事業を直営作業によって実施することとした。本年度は路網の維持管理作業において作業機が接触する立木を伐採、搬出、販売したほか、作業道の拡幅、新設も再開した。これらの直営事業の計画、実行には、昨年度までに整備したLiDARによる微地形図や立木データを活用するとともに、さらにドローンや林内レーザースキャナなどの新たな技術の活用も模索しているところである。

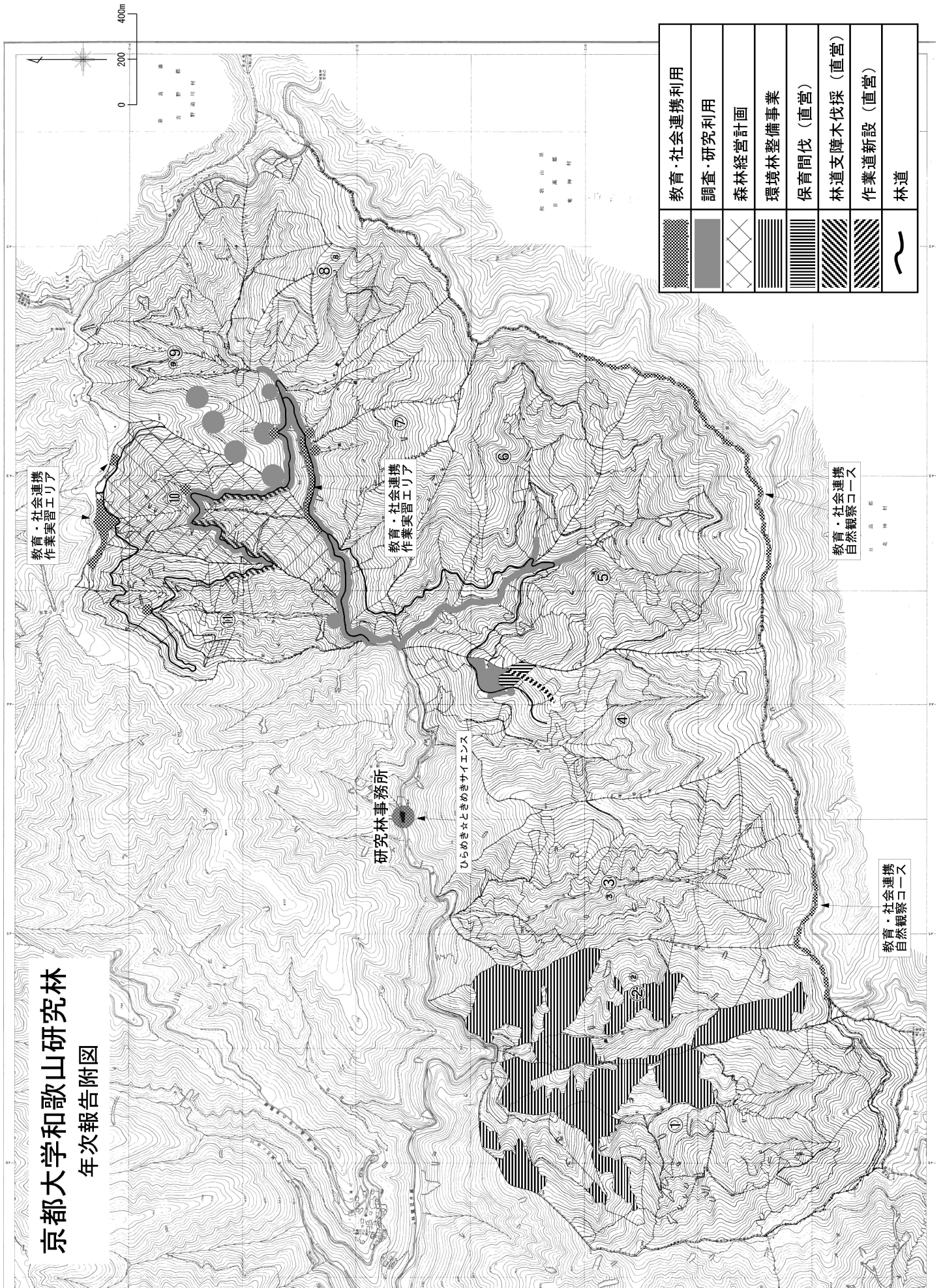


直営での伐採搬出作業



林内レーザースキャナによる精密森林情報

京大大学和歌山研究林 年次報告附图



上賀茂試験地年次報告

上賀茂試験地長 徳地直子

●教育研究

2017年度の利用申請は計83件あり、教育研究に市民の見学などの利用も加えると述べ2,597人が訪れた。

学生実習など教育関係では34件の利用があり、利用者数は延べ1,026人であった。教育関係共同利用拠点として学外からの利用も積極的に受け入れており、他大学の学生を対象にした実習「公開森林実習-近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴-」には8大学1専門学校（人間環境大学、筑波大学、広島大学、東京農工大学、早稲田大学、九州大学、日本自然環境専門学校、京都学園大学、鳥取環境大学）から27名が参加した。他にも京都精華大学、京都府立大学、京都教育大学、京都学園大学、兵庫県立大学の実習を受け入れた。

研究に関しては45件延べ841人の利用があり、研究成果として5件の査読論文、7件の学会発表、2件の卒業論文、1件の修士論文が公表された。本学から近い一方で人口密集地域外という立地からドローンを活用した利用も多く、学生の訓練飛行や実習、技術開発も活発に行われている。



公開森林実習



兵庫県立大学実習

●社会連携

社会連携活動として、2017年度も春と秋に2回の自然観察会を開催した。春の観察会15人、秋の観察会33人の参加があり、応募者にはリピーターも多い。このほかにも、京都市青少年科学センターの「未来のサイエンティスト養成講座」、京都銀行の「京銀ふれあいの森事業（森林ボランティア活動・巣箱観察会）」、総合地球環境学研究所による京都府立北稜高校生を対象とした「地球環境学の扉」、シニア自然大学校の自然観察会など、学外の諸団体が主催する観察会に加え、国有林や美山町森林組合といった外部の研修も積極的に受け入れた。

●施設の特記事項

試験地では設置以来海外の100以上の植物研究機関と交流を持ち、種子交換業務を継続している。2017年度には芦生研究林、北海道研究林、比良山（滋賀県大津市）、八丁平（京都北山）、試験地内などにおいて種子採取を行った。収集した種子は、カエデ科、バラ科などが多かった。42科123種を掲載したリスト（前年度採取種子27種、採取地が異なる重複種子6種含む）を

作成し、40ヶ国 155 機関に送付した（表-1）。今回よりメールアドレスが分かった 67 機関については郵送からメール送信（PDF ファイル添付）に切り替えた。種子の注文は 42 機関から延べ 502 種を受け付け、487 種を発送した（表-2）。人気が高かった種は、タムシバ、アカエゾマツ、カシワなどで、これまでリストに掲載してこなかった種の注文が多かった（表-3）。試験地では 3 科、延べ 12 種を発注した。その中心は過去から収集を続けているマツ科 8 種である（表-4）。

2017年10月23日の台風21号により事務所脇のヒマラヤゴヨウが倒れ講義室の屋根が破損した。林内では外国産マツの造林地を中心に 327 本 238 m³ が根返り、幹折れの被害を受けた。これにより従来行ってきた、全林を対象としたナラ枯れ、マツ枯れの調査が行えなかった。

近畿中国森林管理局京都大阪森林管理事務所と行っているニホンジカ等個体数調整共同研究では、有害鳥獣捕獲申請及び狩猟期の罠による捕獲によりオス 3 頭、メス 4 頭を捕獲した。また、京都大学熊野寮への出没騒動などで増加が懸念されるイノシシ対策として、上賀茂猟友会の協力を得て、檻 2 基による捕獲をスタートさせ、2 頭を捕獲した。

森林フィールド教育共同利用拠点に係る施設整備として、永年の念願であった、事務室棟及び実験室棟のトイレ改修を行った。これにより男女の便所が分けられ、また実験室棟では和式のもの洋式に改良された。これまで上賀茂試験地での実習は女性のトイレが少ないこと、社会人向けの場合は和式では不便であったことなどから、トイレの時間により実習時間が短くなってしまいう傾向にあったが、今回の改良により時間の短縮と快適さが著しく向上した。実習に至るまでの不便さや問題点が改善され、実習に集中できることは実習する側としても、おそらく受講者にとっても基本であると思われ、よりよい実習を目指すよいきっかけになった。



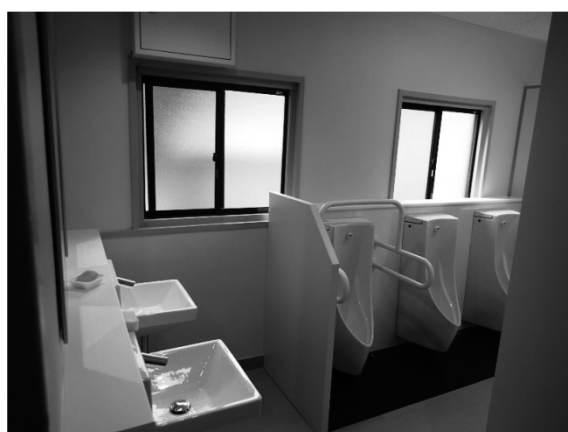
秋の自然観察会



台風被害（講義室屋根破損）



イノシシ檻設置



事務室棟トイレ改修

表-1 リスト掲載種数

科 名		種数	科 名		種数
ACERACEAE	カエデ科	8	LEGUMINOSAE	マメ科	1
ACTINIDIACEAE	マタタビ科	1	LILIACEAE	ユリ科	1
ANACARDIACEAE	ウルシ科	3	MAGNOLIACEAE	モクレン科	5
AQUIFOLIACEAE	モチノキ科	3	MENISPERMACEAE	ツツラフジ科	1
ARALIACEAE	ウコギ科	3	PINACEAE	マツ科	4
BETULACEAE	カバノキ科	6	RHAMNACEAE	クロウメモドキ科	1
CAPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	7	ROSACEAE	バラ科	13
CELASTRACEAE	ニシキギ科	2	RUTACEAE	ミカン科	2
CLETHRACEAE	リョウブ科	1	SANTALACEAE	ジャクダン科	1
CORNACEAE	ミズキ科	2	SAXIFRAGACEAE	ユキノシタ科	8
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	2	SCHISANDRACEAE	マツブサ科	1
DAPHNIPHYLLACEAE	ユズリハ科	1	STACHYURACEAE	キブシ科	1
ERICACEAE	ツツジ科	7	STAPHYLEACEAE	ミツバウツギ科	1
EUPHORBIACEAE	トウダイグサ科	2	STYRACACEAE	エゴノキ科	3
EUPTELEACEAE	フサザクラ科	1	TAXACEAE	イチイ科	3
FABACEAE	マメ科	1	TAXODIACEAE	スギ科	1
FAGACEAE	ブナ科	7	THEACEAE	ツバキ科	4
FLACOURTIACEAE	イイギリ科	1	TILIACEAE	シナノキ科	1
JUGLANDACEAE	クルミ科	2	ULMACEAE	ニレ科	4
LARDIZABALACEAE	アケビ科	1	VERVENACEAE	クマツツラ科	2
LAURACEAE	クスノキ科	3	VITACEAE	ブドウ科	1
				合 計	123

* 前年度採取種子27種、採取地が異なる重複種子6種含む

表-2 受注状況

地 域	リスト発送数 (機関)	受注件数 (機関)	受注延べ数 (種数)	発送延べ数 (種数)
欧 州	129	33	337	326
北 米	14	7	109	108
ア ジ ア	9	2	56	53
オセアニア	3	0	0	0
合 計	155	42	502	487

表-3 受注件数が多い上位7種

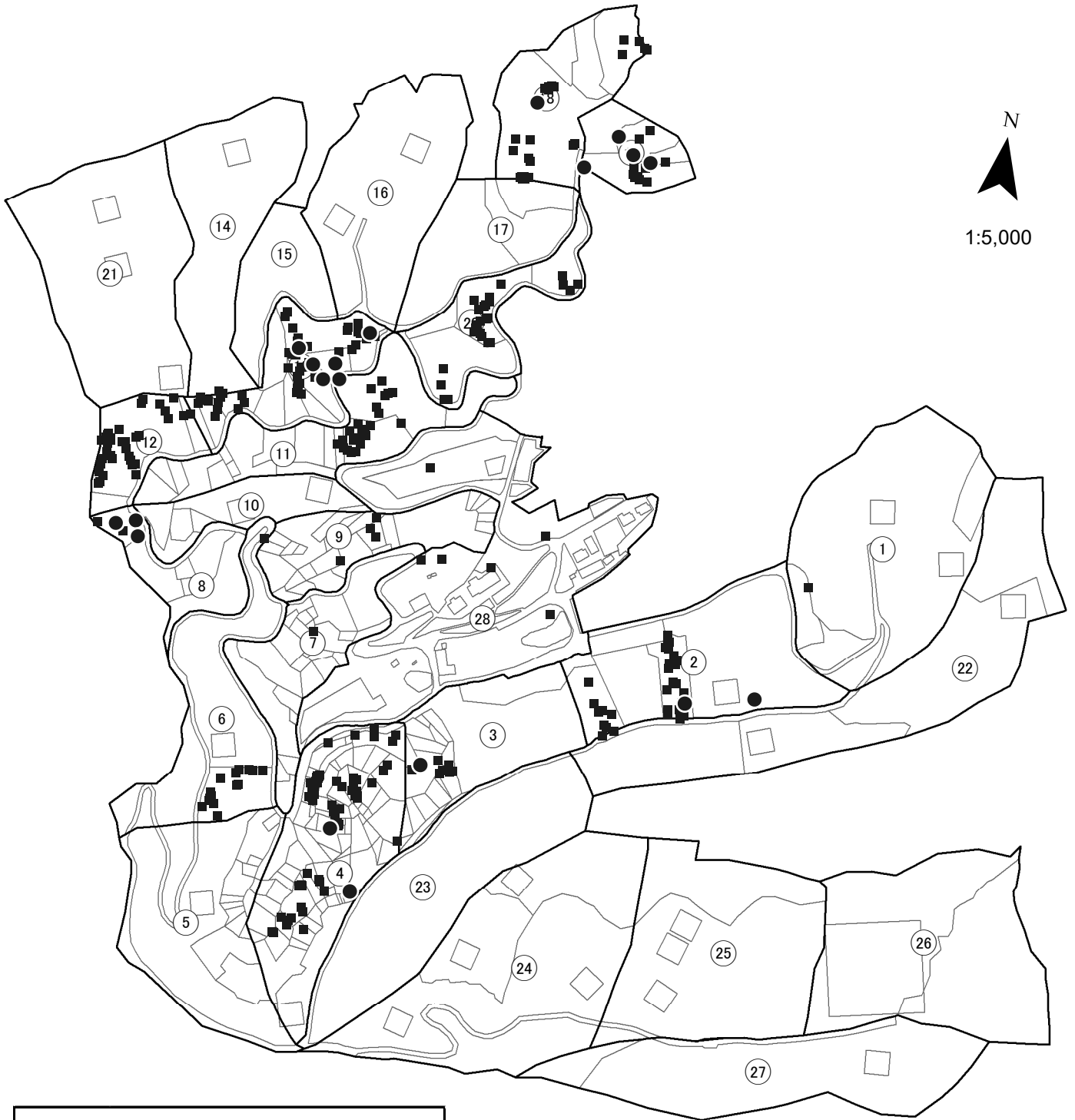
種 名		受注件数(機関)
タムシバ	Magnolia salicifolia	15
アカエゾマツ	Picea glehnii	15
カシワ	Quercus dentata	14
コブシ	Magnolia praecocissima	11
オオハボダイジュ	Tilia maximowicziana	11
トガサワラ	Pseudotsuga japonica	11
エゾユズリハ	Daphniphyllum macropodum var. humile	10

表-4 発注種数

科 名		発注延べ数
FAGACEAE	ブナ科	1
PINACEAE	マツ科	8
ROSACEAE	バラ科	3
合 計		12

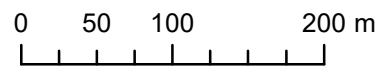
京都大学上賀茂試験地

年次報告附図



凡 例

●	マツ枯れ被害木位置
■	台風被害木位置



徳山試験地年次報告

徳山試験地長 吉岡崇仁

●教育研究

2017 年度における徳山試験地の利用件数はほぼ例年通りの 6 件であった。大学生による教育利用は延べ 40 人、高校生による教育利用 8 人、周南市との連携で実施した公開講座等での一般人の教育利用 57 人であった。この他、試験地内の樹木観察など個人・グループでの一般利用が 113 人あった。なお、研究に関する利用はなかった。

教育利用のうち、京都大学の全学共通科目である少人数セミナー（ILAS セミナー）では、2 科目を受け入れた。ILAS セミナー「環境の評価」は、1 泊 2 日(8 月 25～26 日)の日程で実施され、延べ 12 人の京大生が利用した。8 月 25 日に、檜皮生産のために維持されているヒノキ人工林の整備作業（林床植生の刈り取り）を行った。翌日は試験地事務所にてゼミのレポート発表を地元の徳山高校（SSH 指定校）・光丘高校の生徒 4 人と教諭 4 人の参加の下に行った。もう一つの ILAS セミナー「瀬戸内に見る森里海連環」は、3 泊 4 日(8 月 7～10 日)の日程で実施され、延べ 28 人の京大生が利用した。試験地のヒノキ人工林と天然林の観察・見学の他、周南西緑地公園：旧徳山試験地（万葉の森）、末武川の最源流部・烏帽子岳の赤松ヶ平展望台や温見ダム（下松市の水道水源池）などを見学し、笠戸湾内で瀬戸臨海実験所の大和茂之助教の解説により海洋生物の観察を行った。



ILAS セミナー「環境の評価」



ILAS セミナー「瀬戸内に見る森里海連環」

●社会連携

周南市との連携協定締結により連携事業に関する協力・利用を引き続き行い、2017 年度は下記の通り計 3 回、延べ 57 人の受講生が徳山試験地を利用した。周南市公園花とみどり課と協

力して実施している連携講座に関しては、第 15、16 回を 6 月と 11 月にそれぞれ実施し、受講者は 19 人と 18 人であった。連携公開講座（10 月 14 日）は京大ウィークス 2017 として実施し、周南・光・山口・柳井市から、高校生（5 人）を含む 20 人の参加者があった。まず始めに、公益社団法人全国社寺等屋根工事技術保存会理事である原皮師（もとかわし）の大野浩二氏による檜皮（ひわだ）採取作業の見学を行った。徳山試験地のヒノキ人工林は、2007 年に文化庁から「ふるさと文化財の森（檜皮）」に指定され、檜皮茸のための檜皮を生産する森として維持されており、これを広く地域住民に知ってもらうための取組みでもある。次に水質分析に関する講義・実習を行い、pH メータやパックテストを用いた簡易測定法により、各種の測定を実演した。参加者が持参した水試料を測定し、水質の意味を知る機会となった。さらに、周南市との連携事業の一環として周南市立和田中学校の環境体験学習（ヒノキ人工林の林床整備作業）を実施したのに加えて、山口県立徳山高校との連携講義や SSH 活動（山口・岩国・徳山高校共同セミナー）にも協力した。



連携講座（第 15 回）



連携講座（第 16 回）



環境体験学習



連携公開講座（京大ウィークス 2017）

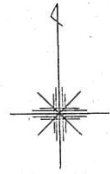
●施設の特記事項

試験地内の「ふるさと文化財の森」に指定されたヒノキ人工林において、全国社寺等屋根工事技術保存会による檜皮採取の技術研修が昨年度に引き続き行われた。2004、2005 年度に檜皮（荒皮）を採取したヒノキが 10 年を経過したので、2 度目の檜皮（黒皮）を採取し、檜皮採取者（原皮師）を養成するものである。この研修によって檜皮（黒皮）が 2,381kg 生産された。

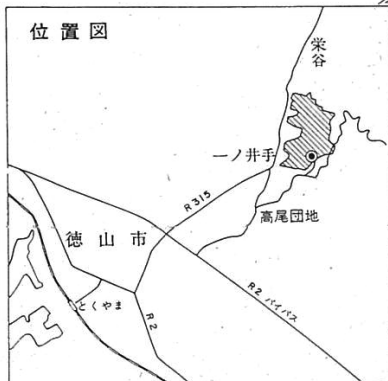
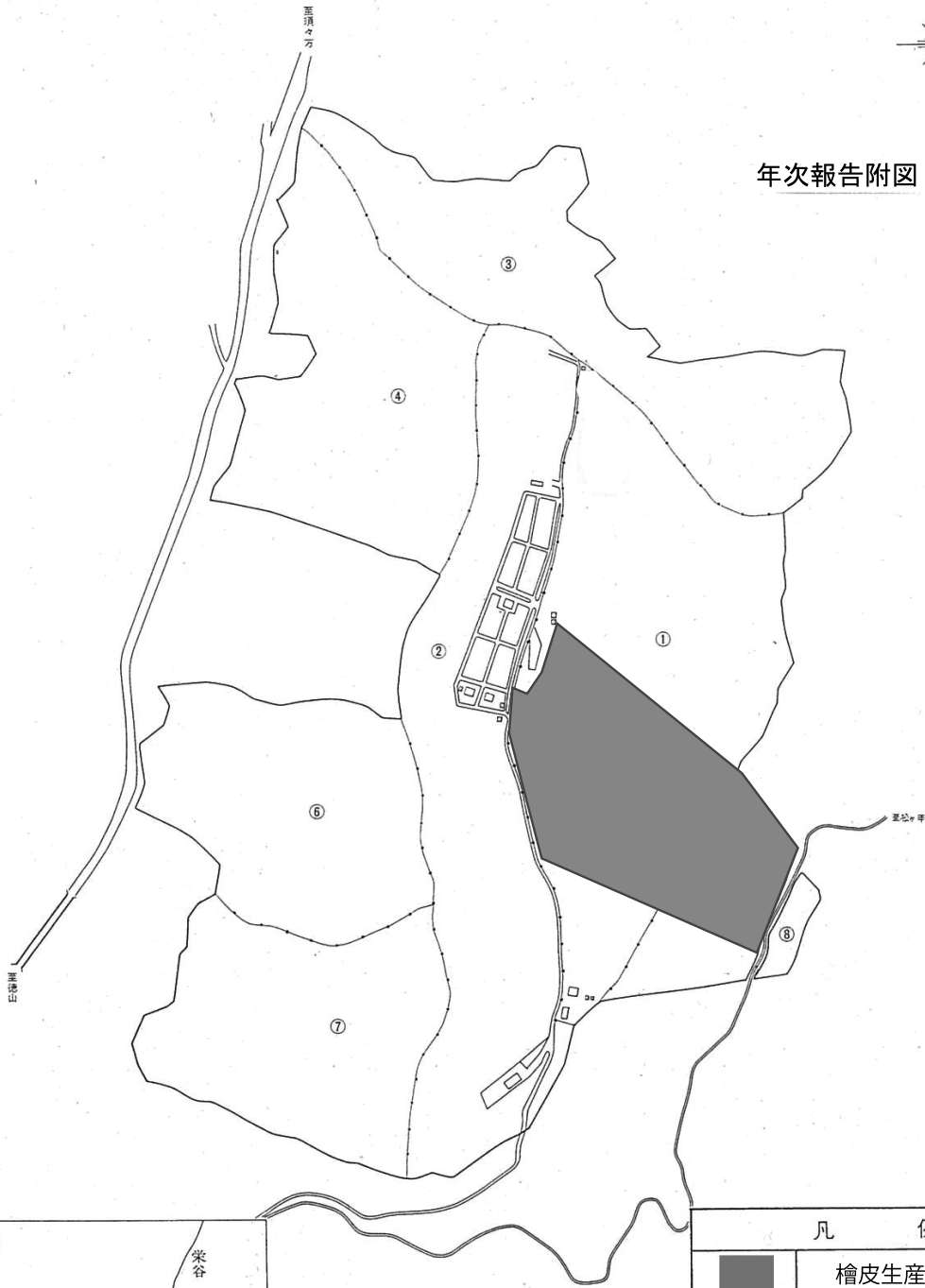


檜皮（黒皮）

京都大学徳山試験地



年次報告附図



凡 例	
	檜皮生産

調整 昭和63年9月

北白川試験地年次報告

北白川試験地長 吉岡崇仁

●教育研究

北白川試験地では、2017年度には、9件の教育利用、26件の研究利用、4件の一般利用、合計39件の利用申請を受け付けた。年間利用者の延べ人数は、教育利用が214人、研究利用が2,562人、一般利用が390人の合計3,166人であり、部局内と農学研究科からの利用が中心であった。

教育利用では、食品有機化学実習によるサワラの枝葉から抗菌物質を精製する実験、森林水文学・砂防学実習や土壌物理学実習による計測機器の使用方法や土壌採取方法の習得、森林科学実習による樹木識別や葉の形質測定、応用生態学実習による野生動物調査に用いる発信機の使用方法の習得など、本学学生を対象とする実習利用があった。また、8月19日、30日には他大学生を対象とする京都大学公開森林実習の一環として、人間環境大学・筑波大学・広島大学・東京農工大学・早稲田大学・京都学園大学・鳥取環境大学からの受講生（2回合計27人）による実習利用があった。

研究利用では苗畑を利用した樹木類の植栽試験や播種試験、ガラス室やハウス内での鉢植えによる樹木類を中心とする植物の生育試験、見本園を利用した樹木・昆虫類などのサンプル採取やナラ枯れに関する研究のほか、敷地を利用した木造建築物の耐久試験や在来緑化植物の形態的・遺伝的変異に関する研究など多岐にわたる分野での利用があった。

●社会連携

一般利用では、京都市・池坊・スターバックス・京大の共催で実施した『外来種いけばな』（72人）などに加え、利用申請を伴わない本学教職員や学生、一般市民の散策や見学による利用者が318人あった。

北白川試験地は、本学キャンパス内にあるため身近で利便性の高い教育研究施設であることに加えて、数少ない憩いの場として本学教職員、学生を初め一般市民にとっても貴重な存在である。この数年の利用者数は増えており、今年度は研究利用に増加の傾向が見られている。



外来種いけばな（皆さんの作品）



直営による境界木の剪定

●施設の特記事項

2017年度は、通常業務として、見本樹の剪定、草刈り、境界木の剪定等を行った。また、境界沿いにある危険木8本の剪定及び樹高調整を直営で行った。また、危険木及び管理上支障となる6本の伐採についても直営で行った。更に、見本樹の高木化、老齢化に伴う被害の危険性がある樹木は危険木と見なし、予め枝下ろしや剪定を行う必要が生じてい

る。被害防止のための枝下ろしや剪定を行う必要があるが、経費が高額となり一度に行うのが難しく、毎年予算を計上し継続して行う必要がある。一方で近年は、見本樹の急な枯死や災害等による消失に備え、後継樹の育成に取り組んでいる。消失した種や希少な種を中心に播種や挿し木、接ぎ木などの方法で増殖を試み、苗畑やガラス室で約 50 種の苗木を育成している。

また、センター長裁量経費により、老朽化した堆肥舎と堆肥溜舎の解体撤去を行い、利用者への安全確保に加えて、手狭となっていた研究利用地を拡大することができた。



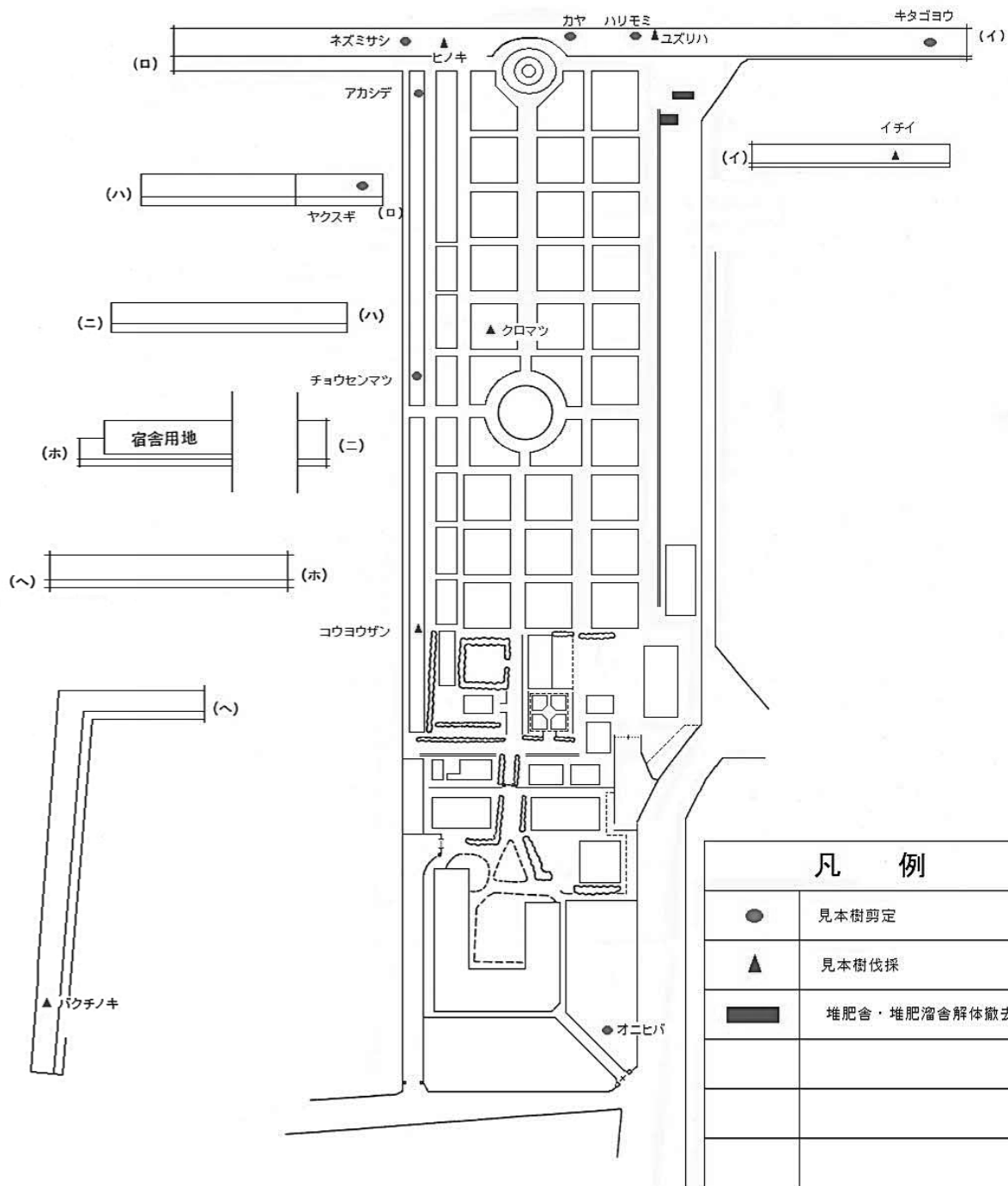
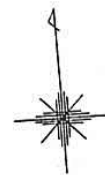
堆肥舎（手前）・堆肥溜舎（奥）解体前



堆肥舎・堆肥溜舎解体後

京都大学北白川試験地

施設年次報告附図



凡 例	
●	見本樹剪定
▲	見本樹伐採
■	堆肥舎・堆肥溜舎解体撤去